

朝堂院朝庭の調査

—第169次

1 はじめに

朝堂院は、藤原宮の中枢部、大極殿院の南に位置する。回廊に囲まれた東西235m、南北320mの長方形の空間で、中央には広場（朝庭）があり、広場を囲むように12棟の建物（朝堂）が立ち並ぶ。都城発掘調査部では、藤原宮中枢部の様相の解明を目的として、大極殿院、朝堂院の継続的な調査を実施し、主要な殿舎の配置と構造をあきらかにしてきた。

朝堂院朝庭に本格的な調査がおよんだのは、第153次調査（2008年度）であり、それ以降、朝庭の利用状況や藤原宮造営から広場の整備にいたる過程の解明にむけ、朝庭の北半部を中心に、調査に取り組んできている。今回の調査地は、朝庭部の中央北寄りに位置し、昨年度おこなった第163次調査の南側にあたる（図101）。

これまでの調査では、広場には排水用の暗渠を設け、その上に礫を敷き詰めて整備がなされていることが判明している。また、宝幢を立てた跡とみられる遺構が検出されるなど、朝庭でおこなわれた儀式の一端を知る手がかりも得られている（第153次）。一方、藤原宮造営に関係する遺構としては、造営資材を運んだ運河や先行朱雀大路側溝がある。そのほか、溝や柱穴などが多数検出されているものの、それらの性格については不明な点が多い。そこで、今回の調査では、礫敷広場の空間利用のあり方を検討すること、藤原宮造営期の遺構の状況をより具体的に解明することの2点を主な目的とした。

調査期間は2011年4月4日から12月15日まで、調査区は東西50m、南北27mの面積1,350㎡で、そのうち、北側9m分の450㎡は、第163次調査区との重複部分である。

（高橋知奈津）

2 検出遺構

基本層序 本調査区の基本層序は、上から表土、整備盛土（70cm）、旧耕作土・床土（30～40cm）、藤原宮期の礫敷層（5cm）、藤原宮造営時の整地土（20～35cm）、地山（橙色シルト）で、地山の標高が低い場所では局所的に藤原宮造営以前の包含層・堆積土（黒褐色粘質土、30～40cm）

が広がる。朝堂院朝庭下層の整地土は、これまでの調査により大きく3段階に区分できることが指摘されている。藤原宮造営開始時期に旧地形をならず目的で敷かれた第一次整地土（暗褐色砂質土）、朝庭の本格的な整備にともなう第二次整地土（灰褐色砂質土）、礫敷広場を整備する直前に施した最終整地土（橙褐色砂質土）である。

これらのうち、第一次整地土については、本調査区内での広がりや東側のエリアに限定的であり、色調も黒褐色を基調とする点で従来のもとはやや異なる。この点は、これまで調査してきた朝庭北端部よりも本調査区内の旧地形の標高が高いことに起因するとみられる。一方、灰褐色砂質土として一括してきた第二次整地土については、下層を褐色砂質土として細分が可能で、同層の上面には遺構が存在する状況も把握できた。また、最終整地土については、調査区西側に広がる橙褐色砂質土に対応して、調査区東側では黄灰色砂質土が施されていることを確認した。

以下では、本調査の検出遺構を大きく藤原宮期、藤原宮造営期、藤原宮以前に区分して、新しい順にその概要を述べる。なお、藤原宮期の遺構は礫敷の上面で検出されたものに限定し、礫敷下で検出されたものは藤原宮造営期の遺構として扱うこととする。藤原宮造営期の遺構面は、最終整地土上面、第二次整地土上面、第二次整地土下層（褐色砂質土）上面、第一次整地土および地山上の計4面存在するが、整地土上における遺構検出は容易ではなく、第二次整地土を20cmほど掘り下げた任意の面で確認できた遺構が大半を占める。それらの遺構変遷については、畦の土層観察や重複関係、出土遺物の状況を踏まえて最後に詳述することにする。（高橋・廣瀬 覚）

藤原宮期の遺構

広場SH10800 調査区全面で検出した広場。表面には径3～10cmの礫が敷かれるが、その多くはクサリ礫と化していた。また、調査区西側15m分は後世の削平をうけ、ごく薄く（厚さ3cm前後）残るのみである。一方、後述の運河SD1901Aの直上では整地土の陥没により礫敷層が厚さ8cmとよく残る。なお、第153次調査区の中央北寄り（ $X = -166,248$ ）と本調査区南端（ $X = -166,286$ ）の礫敷上面では、比高差が38cm前後で、後者が高い。

石詰暗渠SD10780 調査区中央から2.2m西で検出した南北方向の暗渠。幅70cmの溝内部に、径10cmほどの礫を詰める。

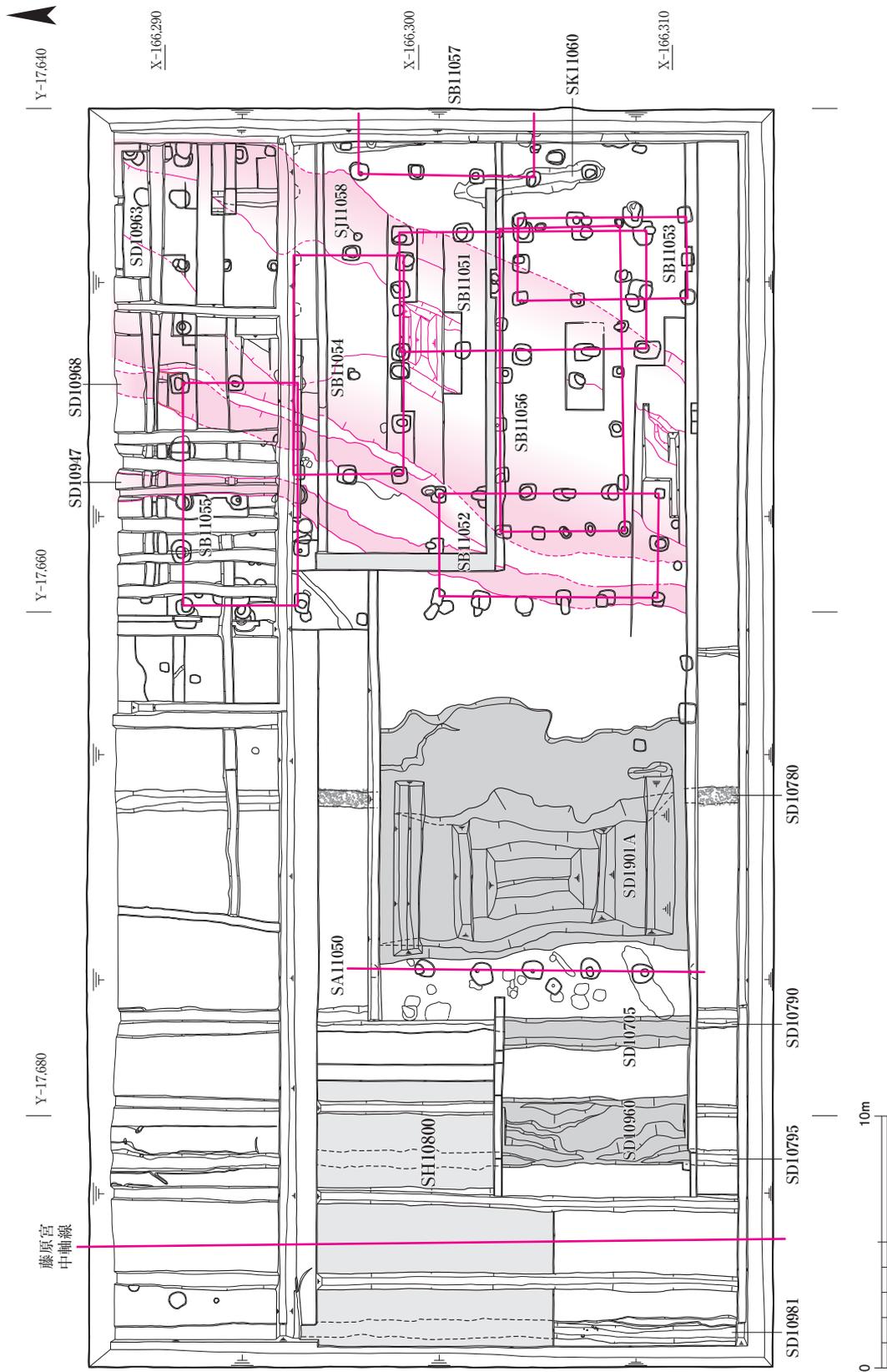


図102 第169次調査遺構図 1 : 250

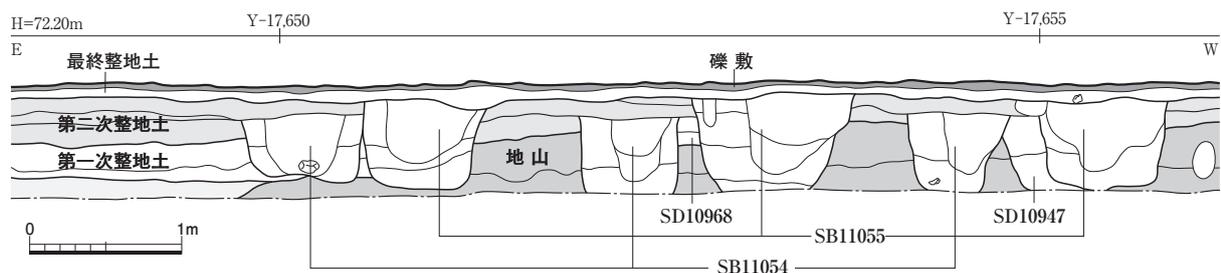


図103 SB11054・11055柱穴断面図 1:50

深さは調査区北で9cm、南で7cmを測る。第153・163次調査で確認した部分と合わせた総延長は66mで、本調査区のさらに南へ続く。雨水排水の暗渠として機能したと考えられ、朝庭北端で東西方向に延びる暗渠排水溝SD10785に接続する(第153次調査:『紀要 2009』)。接続部(X=-166.248)と本調査区南端(X=-166.286)の溝底の比高は50cmで、南から北へ下がる。周辺の礫敷層より大きめの礫を密に詰めており、礫敷上面でも輪郭がとらえられるが、礫敷との前後関係は把握できず、礫敷と一体で施工されたものと考えられる。

なお、運河の掘り下げにともなって下層を調査した結果、礫の詰まった溝の直下に、幅40cm、深さ25cm前後の素掘溝が存在することを確認した。ただし、上下の溝の平面的な位置は厳密には対応していない。下層溝は最終整地土上面から掘り込まれており、内部には青灰色の粗砂が詰まっていた。埋没した既存の開渠を礫敷施工時に礫詰暗渠に作り直したものと考えられる。

藤原宮造営期の遺構

南北溝SD10790 調査区西端から約14m東に位置する。これまでの調査で、幅約1m、深さ15~20cmの溝であると判明しているが、本調査区では後世の耕作溝に東肩が壊されるため、西肩から幅50cm分、深さ15cm分のみを確認した。礫敷層直下の整地土から掘り込む。石詰暗渠SD10780と接続するSD10785との重複関係から、SD10780より前に施工されたことがあきらかである。埋土は暗灰黄色粘質土で、その上に礫敷層を構成する礫と砂がやや厚くなる。また一部の溝底には水性堆積とみられる砂層が確認できた。このような埋土の状況から、一時は開渠であった溝が礫敷施工と同時に埋められたと考える。

南北溝SD10795 調査区西端より8mで検出した素掘溝。幅70cm、深さ25cm。礫敷層直下の整地土から掘り込む。第153・163次調査区では、瓦がまとまって廃棄された状況が認められたが、本調査区では灰オリーブ色シルトの埋土に少量の瓦片を含む程度であった。北で西にやや振れ、調査区の南にさらに延びる。

南北溝SD10981 調査区西端で検出した素掘溝。幅70cm、深さ25cm。礫敷層直下の整地土から掘り込む。埋土は、灰オリーブ色シルトで瓦片と凝灰岩片を含む。第163次調査でも確認した溝で、北で西に振れさらに南に延びる。南北溝SD10795とは、規模・埋土ともに類似する。両溝の心は、藤原宮中軸線(『吉備池廃寺発掘調査報告』2003)を挟んで東西にそれぞれ約3.4mと対称の位置にあり、対になる遺構である可能性がある。(高橋)

掘立柱建物SB11056 調査区東南で検出した桁行6間、梁行3間の東西棟の掘立柱建物。柱掘方は一辺40~50cm前後で、18基中6基において柱根が残存していた(いずれもヒノキ系)。柱根は最も残りの良いもので残存長55cm、直径約13cmを測る。柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では5尺となる。土層観察用の畦にかかった北側柱列の断面観察によると、柱掘方は礫敷直下までは立ちあがらず、第二次整地土上面から掘り込まれている。

掘立柱建物SB11055 調査区中央北側で検出した桁行4間、梁行2間の東西棟の掘立柱建物。大部分が第163次調査区内にあり、『紀要 2011』ではL字形の塀(SA10983・10984)として報告したが、今回の調査で残りの柱穴が検



図104 SB11056北側柱列西3基目柱根(南から)

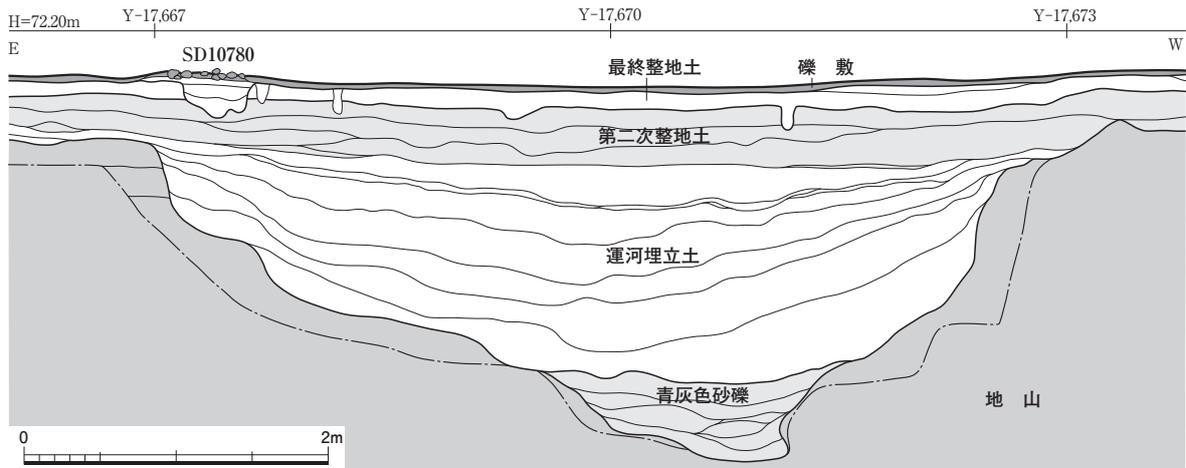


図105 運河SD1901A断面図 1:50

出され、掘立柱建物であることが判明した。柱掘方は一辺60～90cm、柱間は桁行、梁行方向ともに7尺である。中央に径40cmほどの他よりも小振りの柱穴があり、間仕切柱となる可能性がある。抜取穴から檜皮が出土した。第163次調査区の南壁にあたる土層観察用の畦に南側柱列がかかる。本建物の柱穴もSB11056と同様に礫敷直下までは立ちあがらず、第二次整地土上面から掘り込まれている(図103)。

土坑SK11060 調査区東端の第二次整地土上面で検出した南北に長い溝状の土坑。長さ約3m、幅0.8～1m、深さ15～30cm。埋土内から、炭や燃えさしとともに土器が多く出土した。SB11056の東妻脇近くに位置することから、同建物体解体時の廃棄土坑である可能性がある。

掘立柱建物SB11053 調査区南東隅で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟の掘立柱建物。柱掘方は一辺60cm前後、柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では5尺となる。東側柱列の北から1～3基が後述するSB11051の柱穴をこわして掘り込まれている。また同2基目はSB11056の柱穴によってこわされている。

掘立柱建物SB11054 SB11055の東南で検出した桁行4間、梁行2間の東西棟の掘立柱建物。北側柱列東半がSB11055南側柱列東半と重複する。柱掘方は一辺70cm前後、柱間は桁行、梁行方向ともに7尺で、SB11055とはほぼ同規模である。中央に一辺25cmほどの柱穴があり、間仕切柱となる可能性がある。土層断面の観察により、本建物はSB11055よりも1層下の第二次整地土下層から掘り込まれていることが判明した(図103)。

土器埋設遺構SJ11058 SB11054東妻中央の柱穴の東脇で検出した直径35cmの土坑。内部から須恵器短頸壺1点が出土した。SB11054にともなう埋納遺構の可能性はある。

掘立柱建物SB11051 調査区東側で検出した桁行4間、梁行2間の南北棟の掘立柱建物。柱掘方は一辺70～90cm、柱間は桁行方向で8尺、梁行方向では7尺となる。前述のように、東側柱列の一部がSB11056・SB11053によってこわされている。

掘立柱建物SB11052 調査区中央やや東寄りで検出した桁行5間、梁行2間の南北棟の掘立柱建物。柱掘方は一辺50～70cm、柱間は桁行方向で6尺、梁行方向で7尺となる。東側柱列南2基目では、掘方の底に径15cm前後の根石を施して基礎固めをおこなっていた。

掘立柱建物SB11057 調査区東端で南北3間分を検出した。建物本体は、東側の調査区外にあるものと推測される。柱間は8尺で、南側の1基はSK11060底面で検出した。柱掘方は一辺60cm前後、北端の柱穴は深さ約70cmで内部に柱根(ヒノキ系)が残る。

運河SD1901A 調査区中央を南北に貫流する幅約9m、深さ約2mの素掘溝。東肩はテラス状に緩斜面をなしており、それを除く中心部分の幅は約6mを測る。宮造営時の資材運搬に用いた運河と考えられており、第18次調査(『藤原概報6』)の北面中門下層を北端とし、その後の宮中軸付近の調査で検出されてきている。第18次調査区から本調査区までの総長は570mに達する。運河底部には拳大の礫を含む青灰色砂礫が堆積し、土器、木器、獣骨が大量に投棄された状態で出土した。その上部は、地山起源のシルト、整地土と同質の粘質土・砂質土で一気に埋め戻す。今回、埋土を丁寧に掘り下げたところ、各層境には草木類や樹木の皮、木屑などが挟み込まれている状況を確認した。埋め戻し時の湿気抜きのための工夫であるとみられる。運河の埋土はそのまま第二次整地土に移行しており、第二次造成の一環として運河の埋め立



図106 SA11050 (左)とSD10705 (右) (北から)

てがなされた様子がみてとれる。なお、運河上の整地土および礫敷は、運河の形状に沿ってやや陥没している。先行朱雀大路東側溝SD10705 藤原宮中軸線の東約8mで検出した幅1.2m、深さ30cmの素掘りの南北溝。第153・163次調査(『紀要2011』)において断面で確認された溝の延長部分にあたる。今回、長さ7.5m分を平面検出したことにより、第18次調査(北面中門)および第20次調査(大極殿北方:『藤原概報8』)で検出された先行朱雀大路東側溝SD1921とも整合することが確認できた。溝心の座標は、 $X = -166,310.0$ において $Y = -17,676.5$ である。南北溝SD10960 SD10705の西約4mで検出した幅2m、深さ40cmの素掘溝。第163次調査において断面で確認した溝の延長部分にあたる。今回、長さ7.5m分を検出した。第18・20次調査では、先行朱雀大路東側溝SD1921の西でほぼ同規模の南北溝SD1925が検出されており、SD10960はSD1925の延長部分にあたる可能性が高い。柱穴列SA11050 SD10705の東2.5mで検出した南北に並ぶ柱穴列。6間分を検出しており、柱間は7尺等間。柱掘方は一辺50～80cm、残存する深さは10～30cmで、底部付近のみが残存する。内部に柱根を残すものが3基(いずれもヒノキ系)ある。

藤原宮造営前の遺構

南北溝SD10947 調査区中央やや東寄りを流れる幅50cm、深さ35cmの素掘溝で、内部に灰褐色の粗砂が堆積する。SB11052の北でやや西に蛇行した後、再び北向きに流れを変える。第163次調査では、本溝が第二次整地造成後の遺構である東西溝SD10980にT字形に接続することから、本溝もそれと同時期の遺構と理解した(『紀要2011』)。しかしながら、SB11055、SB11052の柱穴が本溝埋土を掘り込むことに加えて、今回、溝埋土から古墳時代の土器が出土したことにより、溝の掘削時期は藤原宮造営期以前にさかのぼるものと判断した。

斜行溝SD10968 SD10947のすぐ東側を並行して流れる幅70cm、深さ20cmの素掘溝。第163次調査でも部分的に検出している。造営期の整地土を残したSB11052付近以南の平面形は不明であるが、調査区南壁には同溝の断面は現れていないことから、SB11052の下層で後述のSD10963ないしはSD10947と重複する可能性が高い。

斜行溝SD10963 SD10968の東側を流れる幅約9m、深さ約1.2mの素掘溝。東西肩付近は緩斜面を呈し、厚さ10～20cmの整地土によって覆われるが、中心部分の幅2～3mは断面U字形で深く落ち込み、内部に大量の灰褐色粗砂～極細砂が堆積する。肩付近を覆う整地土からは7世紀代の土師器高杯片が出土したため、当初は藤原宮造営期に開削された可能性を考えたが、溝内の砂層からはほとんど遺物が出土せず年代の決め手を欠いた。

そこで、砂層上部に含まれる炭化物4点にたいして放射性炭素年代測定を実施したところ((株)パレオ・ラボに委託)、いずれの試料も1 σ 暦年代範囲で3世紀中ごろ～4世紀後半、2 σ 暦年代範囲で3世紀中ごろ～5世紀初頭の年代が得られた。わずかに出土した砂層出土の土器中にV様式系甕とみられる小片が含まれていたことから、溝の開削は弥生時代後期～末にさかのぼる可能性が高く、その後、遅くとも5世紀初頭には埋没していたとみられる。ただし、緩斜面を呈する溝の肩付近には砂の堆積は及んでいない。溝が機能を失ったのちも上部が痕跡的に窪地化していたようで、最終的に藤原宮造営時の整地土によって埋め立てられるに至ったものと考えられる。

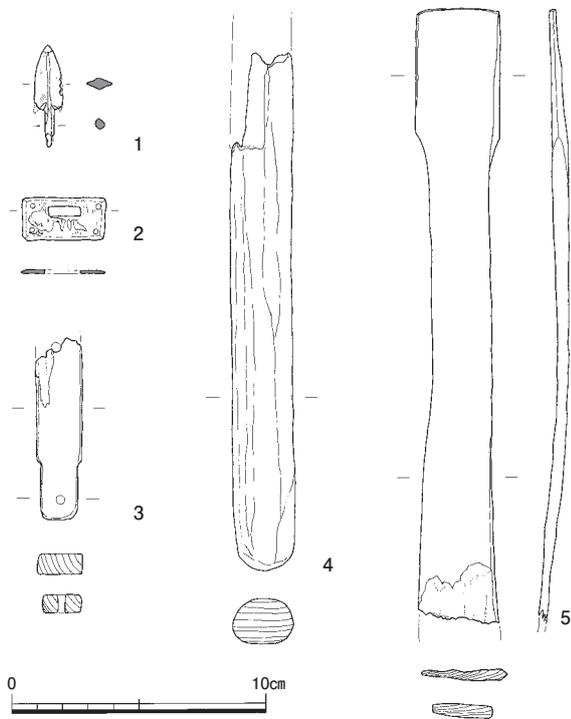


図107 第169次調査出土金属・木製品 1 : 3

3 出土遺物

金属・木製品 1は藤原宮造営以前の包含層から出土した弥生時代後期の銅鏃。長さ4.0cm、幅1.1cm。2は、最終整地土から出土した3.3×1.7cm、厚さ0.15cmの銅製の方形板。中央に0.35×1.3cmの方孔を、四隅に径0.15cmの鉸孔を穿つ。馬具の帯飾金具か。第163次出土の鉸具板金具もこれと一連の製品の可能性がある。3は残存長7.1cm、幅1.7cm、厚さ0.8cmの短冊形の木製品。下部は両側を0.2cmほど抉り、端部を隅丸に仕上げる。径0.3cmの目釘穴を2ヵ所穿っており、下側の孔内には有機質の釘ないしは紐が残る。ヒノキ属の追柂目材、運河SD1901A青灰色砂礫出土。4は残存長20.6cmの円柱状の柄。長径2.4cm、短径1.8cm、スギ材。運河SD1901A埋立土出土。5は篋状木製品で、柄下端を欠損する。篋部側面を薄く削り出す。残存長24.4cm、篋部幅3.3cm、柄部幅2.3～2.8cm、厚さ0.3～0.6cm。ヒノキ属の板目材、運河SD1901A青灰色砂礫出土。(廣瀬)

獣骨 運河SD1901A青灰色砂礫より、多数の動物遺存体が出土した。現在までの分析により、ウマ、ウシ、イヌ、ニホンジカ、カエル類、ヘビ類などが同定できている。特筆すべき資料は、タカ科の手根中手骨である。手

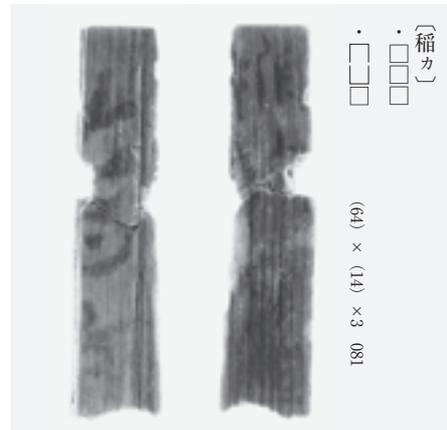


図108 SD1901A出土木筒

根中手骨の最大長(GL)は105.89mmである。環境考古学研究室所蔵の標本と比較すると、トビ(オス:73.67mm、メス:72.98mm)やクマタカ(性別不明:73.12mm、73.92mm)、ミサゴ(オス:83.01mm、メス:87.69mm)よりも大きく、オオワシ(オス:122.18mm、メス:123.16mm)よりも小さい。(山崎 健)

木筒 運河SD1901Aより3点が出土した。いずれも断片で、釈読できたものは1点のみ(図108)。上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。追柂目。2断片が上下に接続する。表面1文字目は「稲」か。(桑田訓也)

瓦類 プラスチックコンテナ13箱分の瓦類が出土した。出土した瓦は、軒丸瓦12点、軒平瓦6点、面戸瓦4点、熨斗瓦1点、隅切瓦1点、ヘラ描丸瓦1点、丸瓦233点(23kg)、平瓦1,223点(101kg)、である(表17)。調査区内には朝堂院を構成する瓦葺建物が存在しないため、瓦類の数量は少ない。以下では、主に軒瓦について、造営期の遺構出土のものと、宮廢絶後に廢棄されたものに分けて述べる(図109)。

①造営期の遺構出土の瓦 運河SD1901Aから少量の瓦類が出土した。軒瓦は運河埋立土上層から出土した軒平瓦6646Aの1点のみである(5)。藤原宮では北面中門や東面北門から多く出土しているこの型式は、近江産と推定

表17 第169次調査出土軒瓦および道具瓦集計表

型式	軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦ほか	
	種	点数	型式	種	種類	点数
6233	Aa	1	6561	A	面戸瓦	4
	Ab	1	6641	F	熨斗瓦	1
	—	1	6646	A	隅切瓦	1
6275	A	1	6647	Ca	ヘラ描丸瓦	1
6281	B	5	—	E	—	—
	—	2	不明	—	—	—
不明	—	1	—	—	—	
計	—	12	計	6	計	7

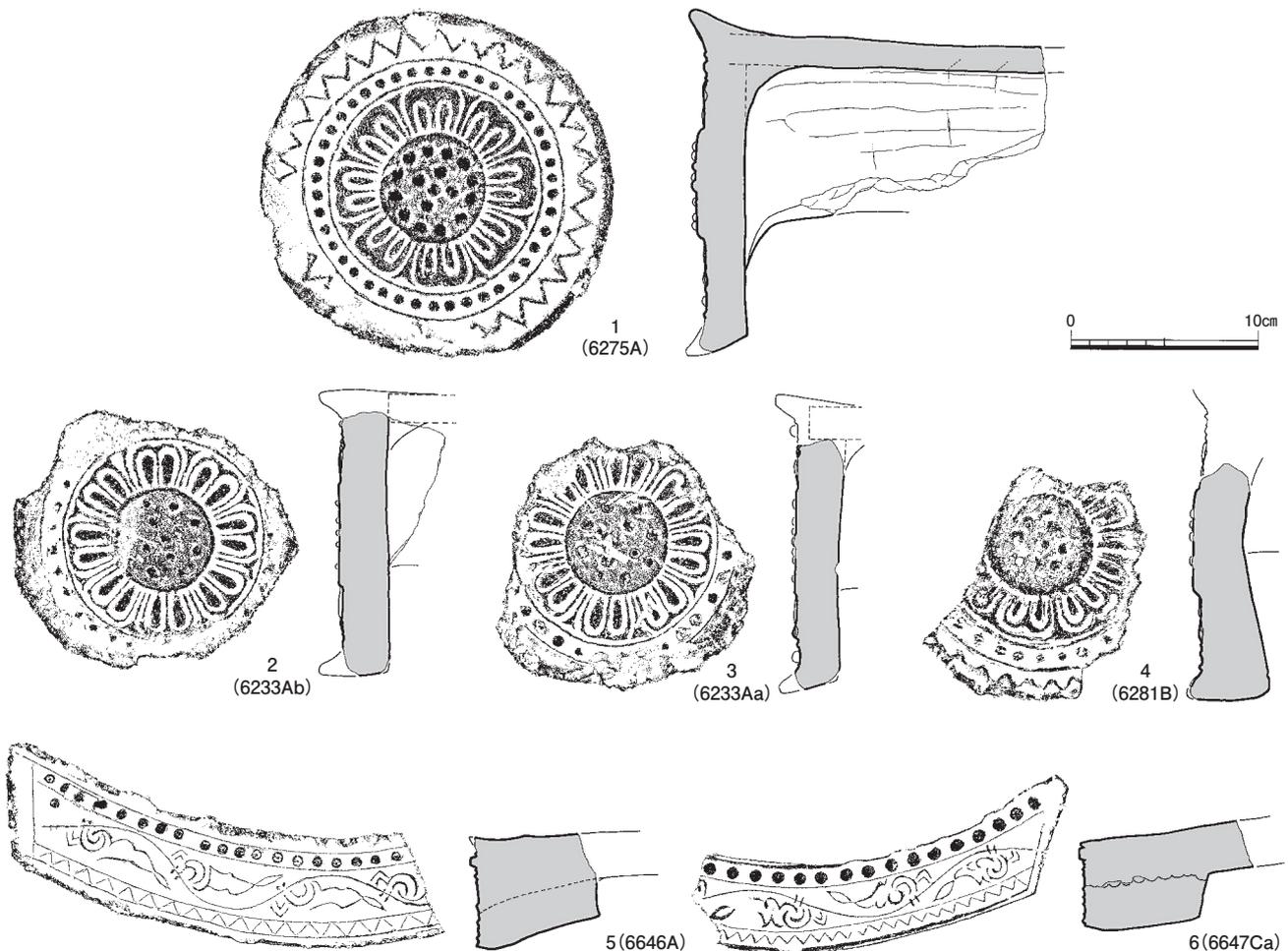


図109 第169次調査出土瓦 1 : 4

されている。

運河出土丸平瓦のうち出土層位が明確なもの内訳は、最下層の青灰色砂礫から平瓦片が1点、丸瓦片が2点、埋立土上層から平瓦片が6点、丸瓦片が3点である。最下層のものを含め、胎土がきわめて粗く砂粒を多量に含むものが多い。N/Pグループ、Qグループと分類される胎土（『古代瓦研究 V』）に類似するものを含むとおもわれるが、小片のため詳細は不明である。最下層出土瓦のなかには、糸切り痕とおぼしき痕跡をわずかにもち、胎土からも牧代瓦窯産の可能性のある丸瓦が、1点のみ出土している。なお、日高山瓦窯産と考えられる胎土をもつ平瓦を砥石に転用したものが、埋立土上層から出土した。

SD10981からは軒丸瓦6233の小片と軒平瓦6647Eの顎部が出土した。後者は大垣での出土例が多い。

礫敷直下から掘り込まれた小穴や整地土から、宮中枢部での出土例が多い軒丸瓦6275Aと6281が出土した。6275A（1）は外縁を面取りしない第1段階（『年報 2000 - II』）のものである。粘土紐技法で、胎土に砂粒・クサリ礫を多く含む。

②宮廃絶後に廃棄された瓦 礫敷整備以後に廃棄された瓦

について述べる。

軒丸瓦には6281B、6233Aa・Abが、軒平瓦には6641F、6647Ca、久米寺式6561Aが認められる（2～4・6）。軒瓦では6281Bが最も多い。6281B-6641Fの組み合わせは、これまでの調査から朝堂や朝堂院回廊所用と考えられている。本調査区内では礫敷整備以後の層から6281Bが5点、6641Fが1点、出土している。6281Bのうち1点（4）には、瓦当裏面に布目痕跡が僅かに残るものを確認した。

6647Ca（6）は牧代瓦窯産に特徴的な白色の精良な胎土をもちいる。焼成は軟質。顎貼り付け部に重弧文風の凹凸を施す。藤原宮では東面北門からの出土が際立って多く、中枢部での出土例は少ない。（森先一貴）

土器 本調査では整理箱75箱分が出土した。主体は古代の土師器・須恵器で、その他に硯、土馬、埴輪、弥生土器などがある。ここでは比較的まとまった出土をみせたSD1901A・SK11060の土器と、SD10705・SJ11058出土土器について報告する（図110）。

SD1901A出土土器は、土師器（1～19）には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、高杯C、鉢、壺B、甕A、カマド、須恵器（20～39）には杯A、杯B、杯B蓋、杯G、椀A、短頸壺、盤、平瓶、甕Aなどがある。

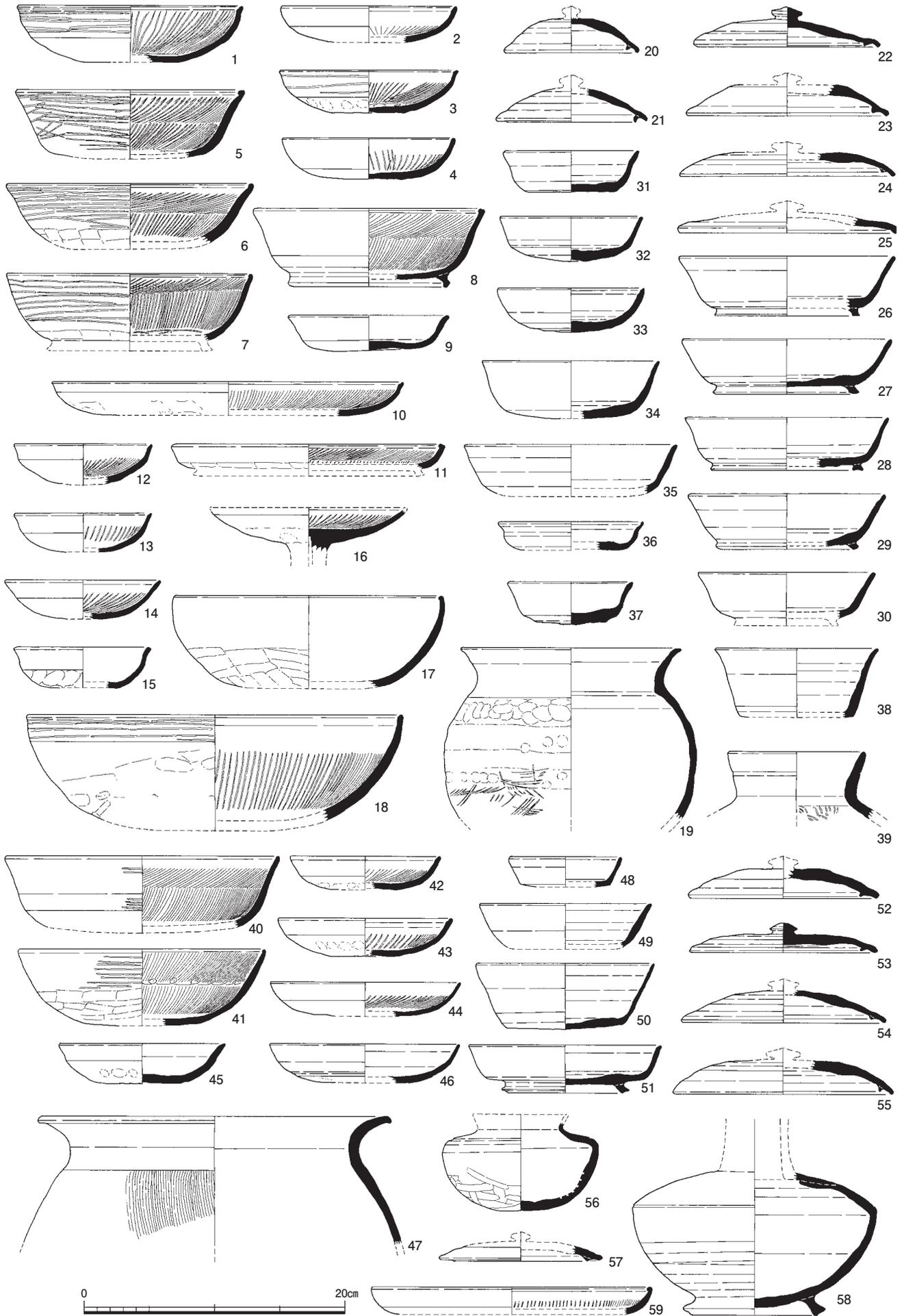


図110 第169次調査出土土器 1 : 4
 (1 ~ 39 : SD1901A, 40 ~ 55 : SK11060, 56 : SJ11058, 57 ~ 59 : SD10705)

杯A(5・6)、杯B(7・8)はいずれも二段放射暗文をもつ。8は内面に漆を塗布する。杯CⅠ(1)は内面に太い放射暗文が入る。杯CⅡ(2~4)、杯CⅢ(12~14)はいずれもa0手法。9は杯X。粗製で、内面に墨の飛沫がみられる。皿B(11)は二段放射暗文をもち、内面に漆を塗布する。17・18は鉢。17の口端部には灯明痕が残り、18は内面に漆を塗布した可能性がある。19は壺B。胴部外面下半にはヘラミガキ風の条線がみられ、胴部内面にはコゲが付着する。31~35は杯A。底部外面は31がヘラ切り不調整、32がナデ。33は底部外面にヘラ記号を有す。26~30は杯B。底部外面は27がロクロケズリ、28・29はヘラ切り不調整。20~25は杯B蓋。25のみかえりをもたない。37は杯G。内面には朱が付く。飛鳥Ⅱの所産であろう。39は短頸壺。口縁部外面中央に凹線が一条めぐる。

SK11060出土土器は、土師器(40~47)には杯A、杯B、杯C、杯G、杯H、皿A、甕A、須恵器(48~55)には杯A、杯B、杯B蓋、横瓶、甕Cなどがある。杯A(40・41)はいずれも二段放射暗文をもつ。杯C(42~44)はいずれもa0手法。47は甕A。大和型。48~50は杯A。50は底部外面にヘラ記号を有す。51は杯B。口端部内面に灯明痕が残る。52~55は杯B蓋。いずれもかえりがつく。55は頂部内外面に漆が付着する。

SD10705からは、土師器皿A、カマド、須恵器杯A、杯B、杯B蓋、壺K、甕などが出土した(57~59)。59は土師器皿A。放射暗文が垂直に施される。58は須恵器壺K。肩部外面には弱い凹線が一条めぐる。

56はSJ11058出土の須恵器壺C。口縁部以外は完存する。底部外面を手持ちヘラケズリで調整する。

以上の土器のうち、SD1901A出土土器は運河機能時~埋立時に廃棄された一群で、飛鳥Ⅳの良好な資料といえる。一方、SK11060は運河埋立後に設けられたSB11056の廃棄土坑と考えるが、出土土器からはSD1901Aとの間に明瞭な様相差は読み取れない。なお、SD10705も出土土器の数量が少ないものの、飛鳥Ⅳの範疇で捉えることができる。(若杉智宏)

4 まとめ

礫敷広場の利用状況 本調査区内で検出された藤原宮期の遺構としては、礫敷広場SH10800、および広場の排水

の目的で設置された南北暗渠SD10780をあげうるにとどまる。むしろこの点は、本調査区の範囲が文字通り広場として機能していたこと示すものと言える。

先行条坊と運河 一方、今回の調査では、広範囲にわたって下層調査を実施した結果、藤原宮造営期の遺構を数多く検出した。そのうち最も古くさかのぼると考えられるのが、地山上で検出した南北溝SD10960、先行朱雀大路東側溝SD10705、柱穴列SA11050である。前述のようにSD10960、10705は、第18・20次調査検出のSD1925、1921の延長部分にあたり、第18次調査では重複関係からSD1925がSD1921に先行することがあきらかになっている。一方、SD10705の東側で検出したSA11050については、先行朱雀大路に沿って設置された区画塀とみてよからう。北側に隣接する第153次調査区でも、先行朱雀大路東側溝の東側で南北方向の柱穴列が発見されており、同じく先行朱雀大路に沿う区画塀とみられる。

これらにやや遅れて運河SD1901Aが設けられる。本調査区内では先行朱雀大路東側溝と検出面を同じくするが、第20次調査では東側溝SD1921に接続する先行四条条間路を切断して運河SD1901Aが設けられていることが確認されている。前述したように、先行朱雀大路に沿う南北塀SA11050の柱穴は底部付近が残存するのみであり、運河の開削にともなって上部を削平された様子がみとれる。

掘立柱建物群の変遷順序 調査区東側で検出した掘立柱建物群については、いずれもほぼ正方位にのっており、藤原宮造営期の建物と考えられる。柱穴の重複関係から、SB11051→SB11053→SB11056の順で少なくとも3時期にわたる建て替えが認められる。このうち、SB11051は地山ないしは第一次整地土上での検出であり、第一次整地にとまなう建物と考えられる。一方、SB11056は、土層断面の観察により第二次整地土上面から柱穴が掘り込まれていることが確認できており、第二次整地が完了し最終整地が施されるまでの時期に位置づけられる。

調査区北側で検出したSB11055も同じく第二次整地土上を遺構面としており、SB11056と同時期に位置づけられる。そのすぐ南で検出したSB11054は、土層断面の観察からSB11055よりも一層下の褐色砂質土から掘り込まれていることが確認できている。ただしSB11055とSB11054は、規模・柱配置が共通するとともに、側柱筋

が一部重複することから、近接した時期に連続して建て替えられた状況が強く推測される。SB11054は、南側ではSB11051と柱筋が重複しているが、前述のようにSB11051は、第一次整地にともなう建物と考えられることから、SB11054の方が後出するとみて間違いはない。柱穴の重複関係からSB11051よりも後出し、SB11056よりも先行するSB11053と同時期とみなしてよからう。

SB11052については、整地土を下層まで掘り下げた段階での検出であり、少なくともSB11055、SB11056とは同時期とはならない。加えてSB11052の北東隅柱はSB11054の南西隅柱に近接しており、両者の同時併存は困難と考えられる。したがって、最も古いSB11051と同時期に位置づけるのが妥当と考える。

以上を整理すると、掘立柱建物群の変遷は、①SB11051・SB11052→②SB11053・SB11054→③SB11055・SB11056の順となる。それぞれの遺構面は、①第一次整地土ないしは地山上、②第二次整地土下層上面、③第二次整地土上層上面となる。なお、調査区東端にかかるとなるSB11057については、南側の柱穴2基がSB11056にともなう廃棄土坑とみられるSK11060にこわされており、SB11056よりも先行することは確実と思われるが、それ以上の位置づけは現状では困難である。

藤原宮造営期の遺構変遷 ここまでの検討を踏まえて、本調査区における藤原宮造営期の遺構変遷を整理する。

まず、先行朱雀大路とそれにそって南北区画塀SA11050が配置され、藤原宮造営期における本調査区内の土地利用が始まる。調査区東側で検出した掘立柱建物群のうち、最も古いSB11051・SB11052については、この時期にまでさかのぼる可能性がある。先行条坊に沿って区画塀を設け、その内部に掘立柱建物を配置する状況は、西方官衙南地区（第5～9・63-8・76・80次）や内裏～内裏東官衙地区（第55・58次）の下層でも確認されている。朝堂院では東第六堂の下層で、最低2時期分の掘立柱建物が検出されている（第136次：『紀要2006』）。なお、調査区東側では、第一次整地土下で古墳時代以前に掘削されたSD10963が窪地状に残存している様子を確認した。この点は、この場所が藤原宮造営開始直前には、ほとんど利用されていなかった状況を示すものと言える。

その後、運河SD1901Aが開削され、藤原宮の造営が本格化する。運河は宮造営時の資材運搬に用いたと推測さ

れているが、底部からは運河が機能を終えた後に投棄された土器や、木製品、獣骨等が大量に出土した。それらは総じて遺存状態が良く、さほど長距離を流されてきたようには見られない。先に掘立柱建物SB11051・SB11052が、先行条坊設置時期にまでさかのぼる可能性を指摘したが、運河をさけて東側に位置しているようにも見受けられることから、建物は運河機能時に同時併存した可能性もある。したがって、東側の掘立柱建物群が運河内の廃棄物の供給元であった可能性も十分想定できる。

いずれにしても、運河は役目を終えると同時に大量の土砂で人為的に埋め立てられる。これと一連の作業で宮内全域に第二次整地土が施される。これ以後、最終整地が施されるまでの間に掘立柱建物群が2時期にわたって展開する。この段階では大極殿や大極殿院南門など宮中軸線上に位置する主要殿舎の建設が開始されていると考えられることから、2時期にわたる掘立柱建物群についてはそれらに関わる何らかの施設であった可能性がある。

そして最終段階には、第二次造成面を覆うように薄く最終整地土が施され、その上に礫を敷いて広場の整備が完了する。ただし、宮中軸線付近では礫が敷かれる前に南北溝SD10981、SD10795、SD10790が掘り込まれている。この段階には既に東側の掘立柱建物群も廃絶しており、これらの南北溝のほかに広場内に目立った遺構は存在しない。前述のようにSD10981、SD10795については、宮中軸線を挟んで対称の位置にあることから、これらの南北溝は、礫敷前の広場中央を縦断するように設けられた通路の側溝である可能性も考えられよう。

5 おわりに

以上のように、今回の調査では、朝庭の礫敷広場の利用状況を確認するとともに、その下層で先行条坊や区画塀、運河、掘立柱建物などをそろって検出し、これまで以上に藤原宮の造営過程を詳しく復元する手がかりが得られた。しかしながら、今回の成果を藤原宮全体の造営過程の中に位置づける作業は十分果たせていない。また、礫敷下層の掘立柱建物群については、東・南側の調査区外にも展開することが確実であり、周辺部の調査を進める中でその性格を改めて検討する必要がある。（廣瀬）